

古語拾遺 一卷 冒頭部分

從五位下齋部宿禰廣成撰

いんへのすくねひろなり

(大同二年807)

けだきひりちん、じやうこのよに、いまたもじあらざるをまに、きせんらうせう

蓋聞、上古之世、未有文字、貴賤老少、

くちやうちにあいつたへ、ぜんげんわうかう、そんなして忘れずと

口口相傳、前言往行、存而不忘、

しよけいよりこのかた、いにしへをかたることをこのます、ふくむきほひおこりて

書契以來、不好談古、浮華競興、

またくらうをわらふ。つひにひとをしてまへていよいよあらたに、

還嗤舊老。遂使人歷世而弥新、

いんをしてよをおひてへんかいせしむ。かへりみてじつをとなに、こんげんをしるごとなし。

事逐代而變改。顧問故實、靡識根源。

こくしかてふそのよしをのすといへども、いちたののみきよく、なほもりたをあり。

國史、家牒、雖載其由、一二委曲、猶有所遺、

ぐしんまをさすは、おそろくはたえてつたふることながらむ。さきはひにせうもんをかがかりて、

愚臣不言、恐絶無傳。幸蒙召問、

ちくふんをのへまほりす。かれ、くせつをしるして、あへてじやうふんす、

欲據舊積。故、録舊説、敢以上聞、

と、まをすことしかり。

云爾。

私が承っておりますところでは、その昔、未だ文字とい
うものがなかった頃、身分の違いに拘らず、老いたもの
も若いものも、すべて口から口へ声で物事を伝え合い、
ずっと前に言われたことも忘れず、それを行いに示し、
決して忘れるようなことはありませんでした。

文字が書かれるようになってこのかた、昔からの言伝え
は喜ばれず、素性の知れぬ新規な話があればこれと拡がり、
故老の話は鼻で笑われ、いまや、人びとの暮らしぶり考
え方は、どんどん新しくなって、物事すべて、時ととも
に姿を変ってしまったのであります。

こういうときこそ、朝廷に遺されております文書を読み
直し、その本来の由来を学びたいと思っております。
「国史」や「家牒」にそれらのことが誌されておるので
ありますが、また、いくつかの点で抜け落ちているとこ
ろがあります。

私がいまここで申し上げておかなければ、誰が伝えてく
れるでしょう。

幸いにも、天皇（平城）にお尋ね戴いたので、日頃胸の
内に鬱積しておりますところを、聞き届けいただければ
と存じます。謹んで申し上げます。

あるはきけり、それあめつちひらくるはじめに、いざなまきいざなみのふたはらのかみ、
一聞 夫開闢之初、 伊奘諾伊奘冉二神、
みとのまぐはひしまひて、おほやしまのくはたまさんせんさうもくをうみませ。

共為夫婦、生大八洲國及山川草木。

つぎに、ひのかみつきのかみをうみませ。いやはてに、すさのをのかみをうみませ。

次、生日神月神。 最後、生素彥鳴神。

しかしてすさのをのかみ、つねになまきいざつらつらをもちてしむせす。

而素彥鳴神、常以哭泣為行。

かれ、ひとくさをしてあからさまにしなしめ、せいぎんをからやませす。これによりて

故、令人民天折、青山變枯。 因斯

かぞいろはのふたはしらのかみ、みことのりしてのたまはく、いましはなはだあつまなし。

父母二神、 勅曰、 汝甚無道。

すみやかにねのくにかむさりすべし。

宜早退去於根國矣

また、あめつちわかれひらくるはじめ、あめのなかにあれますかみ、なほ、あめのみなかの

又、天地割判之初、天中所生之神、名曰、天御中

ぬしのかみとまます。つぎに、たかみむすびのかみ（ふることになかみむすびといふ、これ

主神。 次、高皇產靈神（古語多賀美武須比、是

すめむつかむむきのみことなり）、つぎに、かむむすびのかみ（これ、すめむつかむむら

皇親神留伎命）、 次、神產靈神（是、皇親神留留

のみことなり。このかみのこ、あめのこやねのみこととは、なかとみのあそんがおやなり）。

命。 此神子、天兒屋命、中臣朝臣祖）。

そのたかみむすびのかみうませるむすめのなほ、たぐはたちひめのみこととまをす

其高皇產靈神所生之女名曰、拷幡千千姫命

あまつみおやあまつひこのみこと（このいろはなり）そのをのなほあめのおしひのみこととま

をす

（天祖天津彦尊之母也）。其男名曰、天忍日命

おほとものすくねがおやなり。 また、をのなほ、あめの太玉のみこととまをす（

（大伴宿禰祖也）。又男名曰、天太玉命

いみへのすくねがおやなり）。

（齋部宿禰祖也）。

聞くところによりますと、かの天地が始めて開かれたと
き、伊邪那岐、伊邪那美の二柱の神、みとのまぐわいを
なされ、

大八島の国を生み、山、川、草、木など土の上に生える
生き物をお生みになりました。その最後にお生みになっ
たのが、素彥鳴神でした。そうしてこの素彥鳴神が、た
だただ泣き喚くばかりでありましたので、地上の人びと
は早や死にするし、草の生えた山も枯れてしまうほどな
のでした。

これを見て、父母である伊邪那岐、伊邪那美の二柱の神
は、勅みことよりをなされ、「お前はなんとという道に外れたこと
をしておるのか、しようがない、さつさと地底の根の国
へ神去るがいい」申されましたのでした。

また、この天地が割れて、初めて開かれたとき、天の中
から現れた神がおられました。名を、天御中主神と
申します。その次に現れましたのが、高皇產靈神（昔の
言伝えでは、多賀美武須比たかみむすびといひます。この神は、
すめむつかむむきのみこと
皇親神留伎命です）。その次が、神產靈神（この神の
子である天兒屋命は、中臣朝臣なかとみのあそんでありま
す）。

その高皇產靈神からお生まれになった娘の名は、
拷幡千千姫命たぐはたちひめのみことと申します（天祖天津彦尊之母でござい
ます）。男の子の方の名は、天忍日命と申しました
（大伴宿禰の御先祖神であります）。

もう一人の男の子の名は天太玉命あめのかたたまのみことと申しました
（それが、齋部宿禰の御先祖神でございします）。

ふとたまのあみことのみたるかみのなほあめのひわしのみこと

太玉命所率神名曰、天日鷲命

(あはのくにのいみべらがおやなり) たおきはおひのみこと (さぬきのくにのいみべらが

阿波國己部等祖)。手置帆負命 (讃岐國己部祖

やなり)。ひこさしりのみこと (きのくにのいみべがおやなり)。くしあかたまのみこと

也)。彦狭知命 (紀伊國己部祖也)。櫛明玉命

いづものくにのたまはくりがおやなり)。あめのまひとつのみこと (つ) くしせいせのみこと

(出雲國玉作祖也)。天目一箇命 (筑紫伊勢兩國

のいみべがおやなり)。

忌部祖也)。

ここにすまのみこと、ひのかみに、いづたまはなほおほほして

於是素戔鳴神、欲奉辞日神 (天照大神)

あめにのほりたまはなほ、くしあかたまのあみにて、むかへたてまつるに、みつのやまかた
のまかたまをもつてす。

昇天之時、櫛明玉命 奉迎 獻以瑞八坂瓊之曲玉。

すまのみことこれをつけて、つたへてひのかみにたてまつりたまふ。よけてともにう

素戔鳴神受之、轉奉日神。 仍共約

けひて、すなはちそのたまをかまけしめて、あまつみやあかつのみことをまみます。

誓、即感其玉、 生天祖吾勝尊。

ここをもつて、あまつらすおほみかみ、あかつのみことをひだしたまひて、

是以、天照大神、 育吾勝尊、

おきろにいづくしみをあつめたまふ。つねにむのしたにいだきたまふ。なづけてわき

特其鍾愛。 常懷腋下。 稱日腋子。

(いまのよにたらしむべきをなづけてわかごとくへるは、これ、そのうつれることばなり)。

(今俗号稚子、謂和可古、是、其轉語也)。

太玉命の連れて参りました神の名は、天日鷲命 あめのひわしのみこと

(阿波の國の己部たちの御先祖神です)、そして

たおきはおひのみこと

手置帆負命 (讃岐の國の忌部の御先祖神でございま

す)、

ひこさしりのみこと

彦狭知命 (紀伊の國の己部の御先祖神でございませう)。

それから、櫛明玉命 くしあかたまのみこと

(出雲國の玉作りの御先祖神で

ございませう)。天目一箇命 あめのまひとつのみこと (筑紫と伊勢の二つの國の

忌部の御先祖神でございませう)。

さて、素戔鳴神でございませうが、この神は大地か みち

ら出て行きたいと申され、日の神天照大神に暇乞

いをと天 そら に昇って参られました。そのとき、櫛明

玉命がお迎えなされ、瑞八坂瓊之曲玉を日の神に みつのやまかたのまがたま

捧げるようお渡しになりました。これを持って二

人で占いをなされ、その玉から天祖吾勝尊がお あまつおやあかつのみこと

生まれになったのであります。こうして、天照大

神は吾勝尊を大切にお育てになり、いつも懷に抱

いておられるのです。そこで腋子と呼ばれるよ

うになったのでございませう。(幼子をわかごと呼ぶ

ようになった次第です)